

全編スパッツ着用してます!

# 格闘王の娘

-洗脳-



おいしいうどん



俺は復讐することにした。相手はビーデル。

ミスターサタンの娘だかなんだか知らないが、正義の味方ぶってるやつだ。

この前、女子トイレの盗撮をしたのがバレて、ビーデルにボコボコにされた。

そのせいで、学校ではもう最底辺の生活しか送れない。なら、せめて、俺をこんな状況に陥れた本人が俺の青春に華を添えるべきだ。

しかし、俺がこいつを屈服させるのは無理だ。またボコられるのがオチだ。

だから、この催眠装置を使うことにした……。

イラッ

「何？「こんなと」るに呼び出して？」

「また変な」と考えているんじゃないでしょうね？」

「変な物を見つけて……」「これをちょっと見て欲しいんだ」

「別にいいけど……あと、「この部屋、変な音しない  
ピ」っていう？」





催眠導入音波に気付かれています「と」動揺してしまっ  
た。ピーデルは怪訝そうな表情になる。  
本当はもう少し、導入音波を聞かせるつもりだったのだが……。  
やるしかない。

俺は、目を瞑り、催眠光発生装置を起動させた。

ぼー……



成功だ！

ビーデルがぼーとした表情になる。

催眠が効いているから……だろっ。

これで、一時的に思考能力が大幅に低下し、

その間に命令したことには絶対従うようになる！

とりあえず、催眠が本当に効いているか試すため、

「上を脱いで、おっぱいを見せる」

と命令してみた。



「……はい」

ビーデルは素直に上を脱ぎ、胸を露出させた。

俺は、思考能力が回復する前に、ほかの命令も済ませることにする。

「俺の言うことには絶対従う」と

「……はい」

「俺に危害を加えない」と

「……はい」



あとは何だしよつか。「これだけでも十分だろうっけど……」

「俺とセックスしたいと常々思っつんど」

「……はい」

自分で言っておいてなんだが、よく分からない命令だ。

まあ、「のんぷらどらいらいか。」



ビーデルの目に少し力が戻ってきた。

どうやら、思考能力低下の期間が終わったようだ。

「……えーと、話って……何？」

「もう終わったよ。服を着ていいぞ」

「うん」

今の状況に違和感を持っていないと「ころを見ると、  
まだ思考能力低下しているようだ。」





「一時間ぐらい経ったら、帰れ」  
「分かった」

「こいで、一時間待たせれば、  
ほかの人間に変な命令がインプットさせられる」ともないだろう。

「じゃあ、また」

「うん」

「いよいよ、開始だ。」

翌日。

俺はビーデルをロッカールームに呼び出し、Y字バランスをさせていた。スパッツが彼女の下半身のシェイプを際立たせていて、単純にエロい。しかし、どうにもビーデルの表情が冴えない。

「なんで、そんな顔してんの？」

「……誰か、来るかも知れないし……」



どうにも面倒臭い」とを考えているようだ。  
催眠のとき、常識も取っ払ってやれば良かった。  
しかし、恥ずかしがる姿というのもありだろっ。  
どうせ、俺の言っ「」と」は逆らえないのだから、  
結果は似たようなものだ。



「とりあえず、笑え」

そう言いつつと、「ビードルはき」ちなく笑った。

「うつらう情けないポーズで笑っている女はいい。

支配欲が満たされる



もちろん、見ているだけではつまらないので、俺はビーデルの股間をスパッツ越しに舐める「ム」した。俺が舌を這わせる」と

「……………んっ……………あっ」

と、ビーデルが小さく喘ぎ始めた。

「あっあ……………んん……………あっ…」

やがて、ビーデルの目がトロンとなる。

307

次に俺はビーデルのスパッツを破いて直にマ○○を舐める。  
もちろん、パンツは穿いて「ないよ」指差してはいる。  
「はあ……ん！ ああっん！ っん……」  
おっはっはっは、声「ア」しやなを聞きました。  
「あっ……はっ……はあはあ……んん！ ああー」

くちゅ  
ちゅぽ

はあ♡

ん♡



はぁ♡

ん♡

くちゅ  
ちゅぽ

愛液がしたたり、マ○がとろとろになる。

俺は「のとき、ど、」のあと破れたスパッツで

「いつはどいつかって帰るのだからっと思っただ？」

……上着に着れば、バシないだからっし大丈夫かもな。

それを、スレでも俺にっつてはどいつでもいらっし。



んぎっ...

俺は立ち上がり、ビーデルのマ○コにち○ぽを一気に挿入した。

「んぎっ！」

処女だったからか、痛みがあったようで、ビーデルは苦しそうな声を上げた。

「Y字バランス頑張ってるね」

俺はそう言って、ゆっくりと腰を動かし始める。

さすが、ミスターサタンの娘、挿入してもY字バランスを維持している。

んぎっ  
んぎっ  
んぎっ



はっ♡

はっ♡

はっ♡

「はっ、はっ、んっ、あっ」

ビーテルの呼吸が荒くなる。

俺も徐々にピストンを速める。もちろん、中に出すつもりだ。

「んんん！ あっ！ あっ！」

どうやら、軽くいったようだ。

しかし、なんだか、喘いでいるだけで、盛り上がり欠けるな。

これから調教してかないとな。俺の青春のためにも。

ズッ  
ズッ  
ズッ



俺はがっしりと奥までチンポを差し込み——一気に射精した。  
そして、その状態を維持し、ザーメンを最後の一滴まで、奥の奥に注ぎ込む。  
「ふうあっ……はあはあ……んん、ひっー」  
俺のチンポが脈打つ度にビードルは激しい快感を感じているようだ。  
快楽に身を委ねた虚ろな顔をしている。



はー！

はー！

どろー

「あと三分、Y字バランスしたら、掃除してかえってね」

ピーテルは、最早、何も言えないよついで、  
小さく頷くだけだった。

俺は、だらしのない顔で、マ○コからザーメンを垂らしてらるる  
ピーテルの写真を一枚撮って、「足先に帰る」とトドした。



催眠から一ヶ月ほど経った。

「……みふはらないはな見つからないかな」

ビーデルが俺のちんぽをしゃぶりながら言った。

確かに、マ、コにローターを装着しながら、

学校最底辺の人間のチンポをしゃぶっている姿は見られたくないだろう。

ちゅ

ぶ

Love

だが、この関係は、とっくにバレている。  
ミスターサタンの娘だから、誰も面と向かって何も言わないだけだ。  
ビーデルは俺が、バレていないと言っているから、  
バレていないと信じているだけだ。  
そして、俺もわざとバレるような状態で、「こういふこと」をしている。  
俺は、ビーデルを好きにしている姿を見せつけているおかげで、  
学校で確固たる立場を手に入れられた。  
ミスターサタンの娘の男という。

ゆ

ぶ

ん

「気にすんなよ。しっかりしゃぶれ」

「ふあい」

ビーデルは周りを見るのをやめて、俺のチンポに集中し始めた。

「ちゅう……ちゅぱ……じゅる……」

にゅむ





じゅぽ

んっ♡

しかし、なんだか、気持ちよさそうな顔でフェラされていて面白くない。

俺は、ビードルのローターの振動を強くした。

「んんんんんひゅー！ じゅぴゅー！」

それにあわせて、ビードルが口をすぼめ、バキュームし始める。

やっぱり、「うっじやなきやな。」

ローターを強くするとバキュームというのは、もう条件反射みたいなもんだ。

「じゅ、じゅ、ちゅぴゅ、じゅぽ、じゅ」

グ  
グ  
グ  
グ  
グ





「じゅぽ、じゅりゅ、ちゅんんんん」

そろそろ、イキそうだ。

「今日は、口の中に出すからな」

「ふぁい」

ドビュー… ビュルルル！

俺は思いきり、口にザーメンを流し込んだ。

そして、「こ」からが本番だ。

ドビュルッ



グッ  
グッ  
グッ  
グッ

「よし、啜えたまま、飲み干せ」  
ビードルは命令通り、ちんぽを啜えたまま、喉を動かそうとする。  
だが、ものを啜えたまま、飲み込めるわけがない。  
現に口の脇からザーメンがこぼれている。

とろろお

グ  
グ  
グ

とろろお

ぶ  
ぶ  
ぶ  
ぶ  
ぶ

このとき、舌や口腔内が俺のイッたばかりのチ○ポを刺激するのが気持ちいい。  
「……んぐ」

と、思わず声が漏れるくらいだ。

ビードルは苦しくて仕方ないだろうが。

催眠でもかけてなきゃ不可能なプレイだ。

とろろお

グ  
グ  
グ

俺はたっぷり二分ほど、この刺激を味わったあと、

「片付けて帰れよ。あと飲めなかったから、

罰として、ローターつけっぱなしにしておけよ」

と、言い捨て、ロッカールームを出た。

このとき、今のフェラプレイを覗いていたやつとすれ違ったので、

勝者の余裕で笑ってやった。

ドモドモ

「……ねえ、はやくチ○ポちようだい」

ビーデルは四つん這いの姿勢で言った。

——俺とセックスしたいと常に思う」と

思いがけず、この催眠が役に立った。

そして、今は十分ほどビーデルを焦らしている。

ただ、四つん這いになっているだけなのに、

ビーデルのママ○コは愛液で満たされていく。

ビーデルは更だ、もじもじと体をよじらせる。

どっちら、何もしていかないの、

見られていたるだけを感じていらるようだ。



見ているのも飽きたので俺はテ◯ポをぶち込む。  
「おっほ！ テ◯ポきた！ っはあ！」

ビードルは嬌声を上げる。

初めてセックスをしたときとは大違いだ。

「あっ、んっ！ おっ！ きもちいい……」

ズパ





俺が腰を打ち付けていると、突然ビーデルの声が止まり、彼女の体が一瞬、硬直した。この一ヶ月、数十回セックスをしてきたが、こんなことは初めてだ。しかし、特に気にすることではないと思い、俺は挿挿を続ける。

えっ……

ずっずっ

ずっ

「な、何をしているの！ やめなさい！」  
突然、ビーデルが言った。

さっきまでの甘えた声じゃない。

俺は、先の彼女の変化とあわせて、

彼女の催眠が切れたのだと

一瞬で判断した。

催眠音を聞かせる時間が短かったのだ。

頭が真っ白になった。

キッ

そして、逃げなくてはと思った。

しかし、その考えを上書きするかのようだった。

これでビーデルとのセックスは最後になるぞ。

という警告が頭を支配した。

どうせ、「こ」でやめても、最後までやってやめても、

もう終わりだ。

なら、最後までやった方がいい。







俺はいつも以上に、激しくピストンする。

ロッカールームに肉と肉がぶつかり合う音が響く。

「んっ、ぎっ、や……やめ……」

幸いビーデルは、挿入のおかげで即座に反撃はできなさそうだ。やはり、セックスを続けて正解だった。

「あ……ん……やめ……なさい……」

もちろん、俺は構わず、チ○ポを奥へ奥へと動かす。

なるべく、ビーデルが動けなくなるよう、膣をかき回すよつた。

彼女の弱点を重点的に。



「中...出すのは...」

ビードルが懇願する。

だが、そんなものはおもろん無視だ。

それに、今更だ。こいつのママ「コは俺のザーメンまみれだ。

ビュー、ビュルル、ビュヒュー...

いつも以上に、おれのチポはザーメンを絞り出した。

はあ♡

はあ

くだろ



俺はビーデルの腰が抜けている隙に逃げ出した。  
ビーデルの写真は何枚か撮ってある。  
これで脅せば……なんとかかなるのか？  
分からないが、とにかく逃げるしかない。  
こうして、俺は肉便器と別れることになった……  
と思われた。

—俺とセックスしたいと常に思う」と

この命令が効いたのだろう。

一ヶ月間俺とのセックスを考えていたせいで、

ビーデルは催眠が切れても俺を求めるようになっていた。

さすがに、ロッカールームでのセックスはなくなったが、

ビーデルが借りたヤリ部屋でセックス三昧の日々を送っている。



「いいいい加減、催眠を解きなさい。あなたが催眠キットを使ったことは分かってているんだから……ん……ん……あっ」

「こんな」を言っているが、ビードルのマ○には、ずっぽし俺のチ○ポが収まっている。

ヤリ部屋を自分で借りて、更に、スパッツに穴を開けて、俺を待っていたのだ、まったく説得力がない。俺にとっては好都合だが、もちろん、催眠はもう切れている。現に殴られそうになったこともある。



「あっ……本当に……卑怯……なやつ……んっ

恥をしりな……おっ！ おおんんん！

「うやうやして、口答える」「とで、ギリギリプライドを守っているみたいだ。まあ、らしいもの」「とだ。

どうせ口答えをできるのも「」までだ。

ずっ  
ずっ  
ずっ



「つていうか、お前、生意気だな。セックスしてやんないぞ？」

俺はほかの女でもいいんだからな？」

「あー！ あー！」「めんらはい……さっきのは嘘です……」

「俺とセックスしたいんだろ？」

「はひ……ん！ おっ！ んん！ あん！ あっ！」

「ほか「言う」とは？」

「せーし……あー！ あっ！ くだーさい！ おねがいします……」

あっ

あっ

ズ  
チュ

ズ  
ツ

「しょうがねえな」

といつつつ、俺はビーデルの中に精子をぶちまける。  
結局、催眠が掛かっているときと何も変わらない。

「せーし……いっばひ、きたあ……」

ビーデルはだらしない表情で、小さく痙攣しながら、  
俺のザーメンを受け止めた。

ド  
ク  
ョ





はあ♡

はあ♡

ドククハ

「またな」

俺は腰砕けになったビーデルを放置し、帰ることにした。  
ミスターサタンの娘。

このまま、きっちり調教すれば、俺の人生は安泰だろう。  
正直、ビーデルの体には飽きてきたが、

利用価値は十分にある。

これから、「いっつのおかげでハッピーに生きられそうだ。」

